

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 3日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530580

研究課題名（和文） 80年代の出版・活字文化生産過程に関する実証的研究

研究課題名（英文） The positive research of the scholarly publishing culture in the 1980s: from the cultural practice by the editors

研究代表者

伊藤 守 (ITO MAMORU)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：30232474

研究成果の概要（和文）：1980年代の学術出版文化の変化は当時小規模の出版社で働いていた中堅の編集者の活動に寄るところが大きい。従来の教養主義から距離を取り、また本の装丁やデザインにも工夫を凝らして、あたらしい学術出版の道筋を創り出した。

研究成果の概要（英文）：The change of the scholarly publishing culture in the 1980s was brought from the activity of the editors in small publishing company. They took a distance from the conventional 'Kyoyoshugi', and took a devising of tooling of a book and its design. As a result, they created the route of the new scholarly publishing culture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：1980年代文化、学術出版、編集者、消費社会、教養主義

## 1. 研究開始当初の背景

研究を開始した2010年前後の時期には、1980年代の文化に関する関心が社会学の研究者を中心に高まり研究書の出版が見られた。たとえば、原宏之『バブル文化論』慶應義塾大学出版会、北田暁大他編『戦後日本スタディーズ』紀伊国屋書店などである。本研究も、1980年代を日本の文化の転換期と捉える視点はこれらの研究と重なっている。しかし、当時の文化変容、とりわけ学術出版の分野における変化を、執筆者ではなく、編集者の営みに焦点化しながら明らかにしようとする試みはなされていなかった。

一般に1980年代の学術出版は、「ニューアカ・ブーム」の時期と言われるように、これ

までの「啓蒙主義的」な学術出版とは一線を画す著作が刊行され、その書き手に注目が集まった。出版文化を考察する場合でも、著者＝書き手に関心が払われてきたのである。しかし、言うまでもなく、出版文化は、書き手を発掘し、彼らに書かせ、新たな市場を開拓する編集者の文化的な実践が支えているのであり、かれら編集者が何を志向し、何を考え、何を变えようとして、学術出版を牽引したのか、これを明らかにすることがこの研究の目的であった。

研究期間中に、社会学者の手による大著『本を生み出す力』新曜社が刊行され、出版文化の研究に新たな知見が加えられた。本研究もその知見に多くを学んだ。ただ、その研

究の狙いは「出版社」の活動に当てられ、個々の編集者の営みとその変容については十分な考察がなされているわけではない。その点で、本研究は独自の位置を占めている。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、1980年代の学術出版文化の動向を、実際に編集作業に携わった編集者の活動に光を当てながら、当時の編集作業、編集方針、書き手の「発見」など、さまざまな側面から解き明かすことにある。

すでに前項で指摘したように、この80年代は、消費社会化が急速に進展し、テレビやラジオ文化があらたな脚光を浴びて人々の生活やライフスタイルに多大な影響を及ぼすとともに、CFやポスターといった映像文化もこれまで以上に斬新なスタイルやデザインを打ち出していた時期であった。こうした動向とも連動しながら、出版文化も市場的規模を拡大させていく。その背景には、バブル経済といわれる経済活動を基盤に「企業文化」の発信の手段として雑誌や出版が見直され、少なくない資金が出版界に流れたことがその一因として挙げられる。

この中であって、学術出版も大きな変化に直面したことが予測できる。第1には、人々の志向や関心が多様化し、文字から映像へ、出版物から映像文化へ、とシフトしていったこと、第2には、出版物においても、活字よりもヴィジュアルなものへ、ハードな学術書よりも情報網羅的なものへ、といった読者の基本的な欲求の変化である。こうした変化に学術出版はどう対応し、読者層の拡大に努めてきたのだろうか。

この点を明らかにするために、研究では、当時学術出版の編集に携わり、多くの読者を獲得した「編集者」に対する聞き取り調査を通じて、

- ①印刷・製本に至る技術革新が編集作業に及ぼした影響
  - ②「消費社会化」の影響の下での「営業」と「編集」の関係、経営者の方針
  - ③従来の学術出版の在り方に対する当時の若手・中堅の編集者の理念や考え方
  - ④編集者の移動、編集者間の情報共有やネットワークの有無
  - ⑤戦後の「教養主義」「教養」に対する編集者の構え、ないし「教養」を革新するといった意志や意欲の所在
- といった切り口からアプローチすることを課題とした。

## 3. 研究の方法

初年度の2010年は、1980年代の出版文化の基本的な動向を、出版点数、市場規模などの指標から押さえるとともに、書評紙による特集から伺える出版界の動向、雑誌などに掲

載された編集者の対談などの資料を収集して、80年代の特徴を把握することにつとめた。また、長く「週刊読者人」の編集長を務めた武秀樹氏からアドバイスを求め、どの編集者にヒアリング調査を行うのがよいか、について聞き取りを行い、ヒアリング調査の対象者の絞り込みを行った。

このような下調べを実施した後、以下で述べる編集者の聞き取り調査をメインに据えて本研究を進めた。

2010年度は、上記の武秀樹氏のヒアリングに加えて、勁草書房の元編集長・富岡勝氏に対する調査を数回にわたり実施した。富岡氏は、浅田彰『構造と力』の刊行の際の編集者であり、いわば「ニューアカ・ブーム」の火付け役とでもいうべき編集者である。また勁草書房を社会科学分野の学術出版の拠点とするに力を発揮した。

さらにせりか書房の船橋純一郎氏に対する聞き取り調査も行った。船橋氏は、中沢新一『チベットのモーツァルト』『森のバロック』など80年代を代表し、浅田氏とともに「ニューアカ・ブーム」をリードした中沢氏の著作の編集者である。

2011年度は、日本における学術出版の柱とでもいうべき岩波書店で、長く『思想』の編集長を務めてきた合庭惇氏に対するヒアリング調査を行った。言うまでもなく、岩波書店は日本を代表する学術出版社であり、この学術文化をリードしてきた岩波が80年代のあたらな「知」の台頭や小出版社の活発な出版活動にいかに対応しようとしたのか、その点を丹念に調査することを目指した。さらにこの年度は、河出書房新社において思想・文学の分野の出版で編集を行い、かつ文芸誌の中でも重要な雑誌の一つである『文藝』の編集長を担ってきた高木有氏（現在、作品社の取締役・編集担当）に対するヒアリングを数回にわたり行った。興味深いのは、合庭氏、高木氏そして昨年度ヒアリングに協力していただいた富岡氏がいずれも河出書房新社から編集者としてのスタートを切っていることである。

2012年度は、80年代の出版文化の一つの特徴をなす雑誌文化を視野に入れた。上述したが、この時期はこれまではないさまざまな雑誌が創刊され、学術と娯楽の境界が不鮮明化し、「知」の在り方、「知」のスタイルが変容する時代であった。ヒアリング対象者のお一人は、七字英輔氏である。『情況』の編集を担当、その後アメリカの雑誌『ローリングストーン』の日本語版の編集長を務め、またポーラ研究所発行の『is』の編集長として活躍された方である。もうお一人の方は三上豊氏で、雑誌『美術手帖』の編集長を長く務められ、美術・芸術分野と人文社会科学の境界を越境しながら新しい雑誌文化の創造に

力を注がれた方である。なお、この年度は、フォロー調査の位置づけで、武秀樹氏、船橋純一郎氏から再度のヒアリングも行った。

以上、研究の方法は、丹念な聞き取り調査をメインに据えながら、3年にわたり文献・資料収集を行い、研究を遂行した。

#### 4. 研究成果

3年にわたる研究の成果については、以下、4つの論点から明らかにしたい。

##### (1) 80年代の中堅編集者の世代特性

80年代から90年代に学術出版をリードした中堅の編集者の多くは1960年代末に大学を卒業して70年代に編集の仕事を知った。つまり、学生運動を身を持って体験し、その後に入社した世代と言える。彼らが学生時代に愛読した書物の作家として吉本隆明の名が共通して挙げられたことは興味深い。また70年代はまだ活版印刷の時代で、校正や写植の分野で「天才」と呼ばれるような優れた職人がおり、彼らから徹底的に編集の仕事を知ったという。

ヒアリング調査から伺われたのは、編集の仕事に就いた70年代は、学術出版の変化の入口であったという点である。それまで箱入りのハードカバーで初版が3000~4000部であった学術書の売り上げは徐々に低下し、新しい機軸を出さねばならないところに来ていた。当時の編集者の感覚からすると、すでに70年代半ば以降学術書は売れない状況にあったという。

##### (2) 教養主義の変容

戦後、日本の学術分野は、西欧の近代主義ならびにその基盤をなした啓蒙主義の思想を基軸としていたといえる。それを出版事業として支えていたのは「岩波文化」である。実際に、岩波書店の主要な雑誌である『思想』の編集に関しては、外部の知識人が深くかわり助言を与えていたと言うし、その多くがドイツの社会思想や社会学、つまりカントやヘーゲル、マルクスやウェーバーに繋がる人文社会科学の専門家であったという。しかし、その基盤はしだいに揺らいでいく。

また戦後の日本の人文社会科学分野で大きな影響力を維持していたマルクス主義は学生運動の「敗北」あるいは衰退とともにその権威を失墜させ、退潮していく。さらに映像文化・ヴィジュアル文化の拡大というかたちで進行した「消費社会化」の波は、重厚な人文社会科学の書籍への関心を弱め、正統派を自任するある種の権威主義的な「知」の在り方に対する懐疑を生み出していく。編集者自身が経験した学術出版物の売り上げ低下という現実はこの出版文化の底流にあった変化から帰結していたと見ることができる。

他方で、すでにヨーロッパとりわけフラン

スで1960年代以降に興隆しつつあった「ポスト近代」と言われる思想潮流、具体的には構造主義言語学や文化人類学や記号論はまだ日本では十分な紹介や受容はなされていなかった。それを担ったのは、「岩波」ではなく、人文社会科学分野では新興の中小の出版社であった「みすず書房」や「せりか書房」や「勁草書房」であり、その中堅の編集者であったといえる。彼らが、当時30歳代の若手研究者を見つけ、彼らに研究成果を公開する手段を提供したのである。それは、従来の教養主義の中身を転換させ、かつ同時に教養主義という枠組み自体を突き崩していたのである。

##### (3) 編集者による書き手の「発掘」

ヒアリング調査から浮かび上がるのは、当時の編集者が従来とは異なる「面白い」研究を発見するために大学の紀要や雑誌を丹念に調査して新しい書き手を自身で見つけ出す努力を積み重ねていたということである。それは、いつの時代でも編集者に求められる作業である、との指摘を受けるかもしれないが、彼らは頻りに大学に出入りし、これまでの出版でお世話になった研究者から新人の若手研究者の紹介を受けたり、紀要を読んで「面白かった」研究者に直接出向き、出版の相談に行くなど、積極的に行動したといえる。また、重要と思われるのは、この時期、編集者間のネットワークが存在し、相互に情報を交換し、新しい書き手を紹介するなどのことが行われていたという事実である。

こうした新しい動向の中で、本の体裁やデザインも変化していく。すでに指摘したように、これまでの学術出版物は箱入りの重厚なハードカバーが一般的であった。しかしそれは値段の面でも読者の購買意欲を掻き立てるものではなくなっていた。それに替って、ハードカバーではありつつも色刷りの斬新なデザインを施された表紙の学術出版物が発行される。その中には、勁草書房の出版物に代表されるようなビニールで書籍をカバーしたものも現れた。「ニューアカ」と言われる出版文化の書籍は、実際にはこうしたこれまでの学術本とは異なる装丁を施された書籍であったことはあらためて確認されてよいことだろう。

編集者によれば、「いま振り返っても、あの時期に「ニューアカ・ブーム」と言われるような、特定の、しかも難解な本が売り上げを伸ばしたのか、よくわからない」という。そもそも何が売れるかは予測できない。しかし、それでもここで言えるのは、70年代の「閉塞感」を体感してきた編集者が新たな書き手を見つけ、あらたなスタイルの書籍を世に送り出すことで、それまでの教養主義やマルクス主義の楔から「解放」された出版の空間を押し広げていったということだろう。

#### (4)消費社会化、企業文化と出版

ヒアリング調査の対象者たる編集者の中には、当時経営者が変わり、売り上げを重視する方向が強まることもあったという。また営業職の社員との協議も従来以上に行われた。しかしながら、出版の営みは、編集者の個人的な意向や好みに左右される側面が大きく、誰に書かせるか、どの程度の発行部数にするか、次はそのジャンルにするかなど、編集の際量は編集者に任せる自由な雰囲気はまだ残されていたという。もちろん、出版社の規模の違いが存在するものの、ヒアリングに応じていただいた編集者が年間に刊行する点数は10~15点、場合によっては年間で20点を超える時期もあった。

経営者（経営体）との関係でいえば、この時期に企業文化の発信という位置づけで刊行された雑誌について見ても、事情はそれほど変わらない、というのがヒアリング調査からは伺われた。象徴的なのは、ポーラ研究所から発行された『is』の編集責任者として長年編集に携わった七字氏の発言である。雑誌刊行の資金は提供してはいるものの、企業は一切編集には口を出さず、自由に編集することが可能であったという。その環境の下で、知識人や芸術家や文化発信者など多様な書き手を配置しながら紙面を構成する。読者が読みやすいように短めの文章にして情報量を多くするなどの工夫がなされた。いわば、カタログ的な紙面づくりである。

三上氏は『美術手帖』でもデジタル化された雑誌製作のもとで多様な紙面の作りが可能となり、写真と文字の自由な組み合わせ、また分野を超えた執筆者による「総合文化雑誌」の色彩が強い紙面作りを行ったという。

それは、学術誌を中心に書いてきた書き手をよりポピュラーな文脈で活用し、読者に提供することにもつながる。それはたしかに「知」の消費化を後押しする契機ともなったが、また他方でさまざまな異文化の「知」をコラボレートする契機ともなったといえよう。

#### (5)小括

80年代の学術出版文化そして雑誌文化が今日までつながる活字文化の「発端」にある。それは、戦後30年近く続いた学術文化を変容させ、消費社会化の中で「学術」という文化を発信させ続ける困難な課題を担い続けてきたからである。デジタル化と言われる出版技術環境の変化、大学や教育機関の中の「知」や「研究」の動向の変化、そしてなにより読者の嗜好や関心の変化に対応しながら編集者は自身の仕事を遂行してきたし、その自由な活動の余地がまだまだ残されているなかで80年代の出版が行われてきたのである。しかし、90年代以降、学術出版は一方では経営的な側面が重視されるなか、教科書

というスタイルの出版が拡大していく。また他方では新刊書で1000部、重版なし、という出版形態が一般化し、刊行点数を意識的に増やしていかなざるをえない状況も生まれている。80年代の出版文化の特異性をあらためて検証する必要がある。

その点で、今回の研究を通じて残された課題は、70年代の文化変容を射程に入れた考察が不可欠であるという点だ。つまり、80年代に生まれた人文社会科学の学術分野の変容を80年代という時間枠で捉えてはならず、実は70年代からの継続的な変化の過程で生じたものとして見直す必要があるということである。この点については、今後の研究に委ねたいと思う。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

伊藤 守 「メディア環境の変動とメディアリテラシー」『札幌学院大学総合研究所 Booklet』No. 4, 11-27 頁

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 2 件）

伊藤 守、吉見俊哉他『書物と映像の未来』岩波書店、2010年、  
伊藤 守、正村俊之他『コミュニケーション理論の再構築』勁草書房、2012年、272頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 守 (ITO MAMORU)

早稲田大学教育・総合科学学術院 教授

研究者番号：30232474

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：